

特118

大東京震災実記

7

水村莊十著

国立国会図書館



始



内務省認可

大東京震災實記

曠野社刊行



特118

7

大東京震災實記

廣野社編

目次

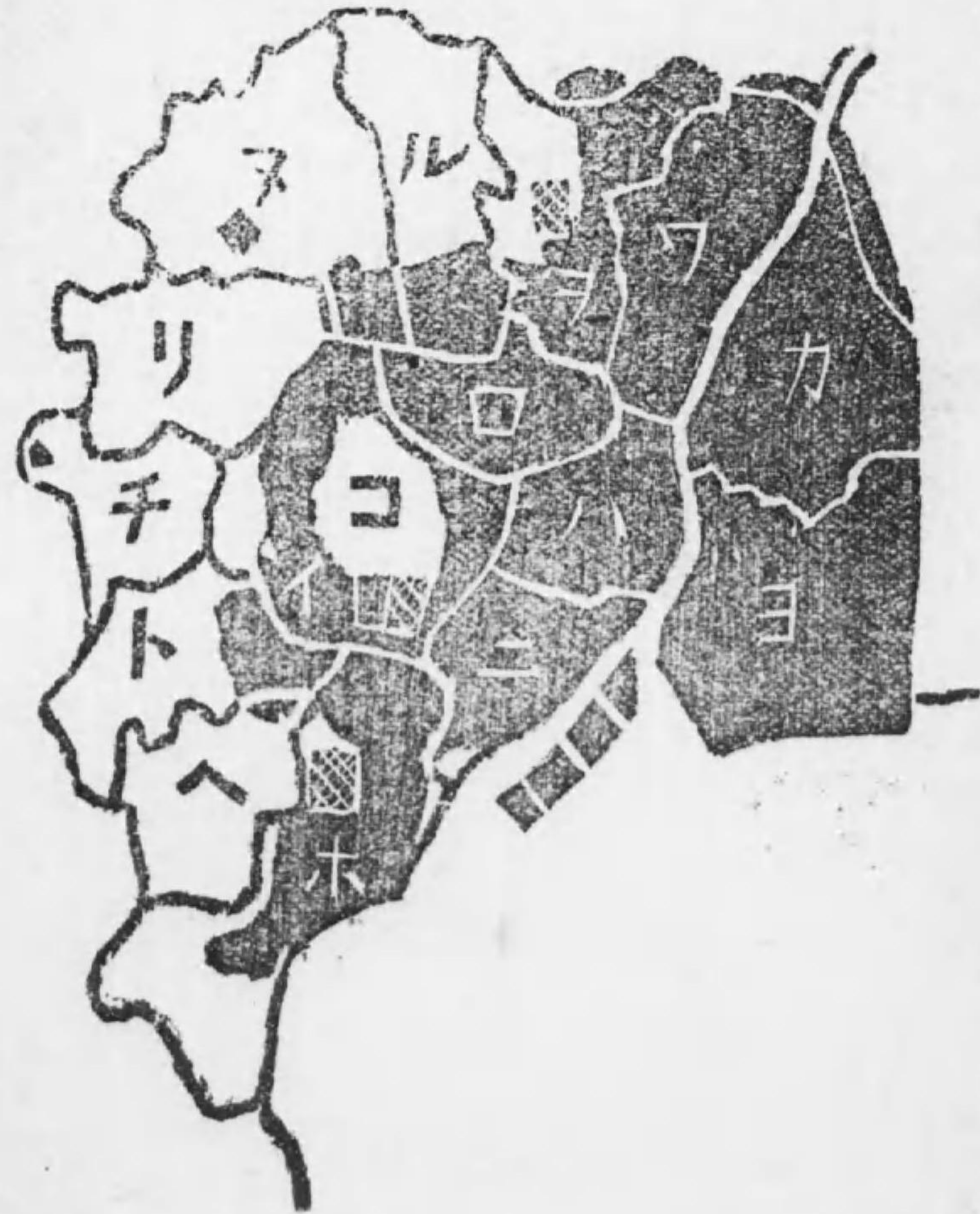
- □ 被害地略圖
- 一、はしきがき
- 二、利那の光景
- 三、其夜の光景
- 四、被害實狀
- 五、近縣各地被害
- 六、戒嚴令施行と救濟方法
- 七、新内閣成立
- 八、攝政宮御無事
- 九、天皇陛下御下賜金

大正
12.11.3
内交

全市被害略圖

—黒き部分は焼失區域—

- イ、麴町
- ロ、神田
- ハ、日本橋
- ニ、京橋
- ホ、芝
- ヘ、麻布
- ト、赤坂
- チ、四谷
- リ、牛込
- ヌ、小石川
- ル、本郷
- ヲ、下谷
- ワ、浅草
- カ、本所
- ヨ、深川
- コ、宮城
- 、公園



焼失區域

芝區

高輪の東宮御所炎上、田町八丁目より市電兩側を北に進み同一丁目三田車庫から四國町の電車通と本芝の電車通を包み芝公園の東方金杉から濱松町神明町新錢座全部、西は麻布赤坂境東は汐止日蔭町烏森に至る全部、神谷町巴町愛宕町愛宕下田村町佐久間町等全部を焼き内幸町の麴町境に至つて止む。

京橋

最初山下町附近から起つた火は新橋藝者屋町から銀座通に出で木挽町の逕信、農商務兩省、築地精養軒へと延び北に向つて銀座大通を挟みつゝ、幅十數丁にわたつて平押に進み日比谷方面からの飛火と合して銀座尾張町を越え京橋に飛び橋を越えて第一相互角の南傳馬町より日本橋區に入つた。一方は築地新富町明石町靈岸島の大川端にまで及び月島佃島も皆滅し一區餘す處がない。

日本橋

西は外濠東は大川筋南は京橋境北は淺草に至る區内一戸も残さず。

本所、深川

皆滅。

浅草

西は大川東は神田下谷境南は柳橋向柳原から北は橋場吉原方面悉く燃え、東京電燈専賣局高等工業明治病院浅草公園六區東本願寺その他に延焼したが浅草觀音は不思議にも残つた。十二階は地震と共に倒壊した。

下谷

谷中方面を除き南は神田境東は浅草境北は日暮里金杉方面までを焼き盡くした。上野驛は勿論区内の大建築物は跡形もない。

本郷

切通しから春日町に至る東切通を境にしてその東南方湯島元町方面は全焼した。尙帝大の諸建築物も六七分通りを失つた。

神田

和泉町佐久間町の一部を除き之亦全滅といつていゝ、錦町神保町邊の諸學校、大通りの諸大商店、駿河臺の諸病院邸宅等全焼。

麴町

日比谷有樂町附近から出た火は南北境にのび南は帝國ホテル前通、北は帝國劇場にまで及んだ。丸ビル、海上ビル有樂館郵船ビル、東京會館等の新築物は火焰はまぬかれたが大龜裂を生じた。東京驛は無事だつたが驛の北方にも火が

起り神田橋まで延び鐵道省、興業銀行、印刷局、中央電話局、内務省、大藏省、稅務監督局を燃した。更に麴町大通を中心に南は平河町北は番町の大部分。富士見町九段下飯田町一帯に及んだ。靖國神社及麴町八九丁目までは辛くも難をまぬかれた。

赤坂

山王下の藝者屋町を中心に近衛三聯隊の高臺より見おろす一帯の低至る地は全く焦土と化した。

小石川

砲兵工廠は全部。それより西方牛天神下の新諏訪町を江戸川べりに一帯を焼いた。

四谷

新宿追分を中心に西は電車々庫より東は二三丁目の間頃まで火は南北に長く旭町花岡町間をやいた。

なほ麻布牛込の兩區はほやが一ニヶ所あつたのみで火災は全く無く郡部は南千住、龜井戸、大島町等は殆ど全滅、中澁谷の一部もやけた。重なる焼失建築物は記事中に擧げてある。

大東京震災實記

一、はしがき

大正十二年（西曆千九百二十三年）九月一日は、建國以來未曾有の天變に依つて我が文化史上特筆大書さるべき最大厄日となつた。この日中央氣象臺は東京地方にタイ風の餘波通過を報じ、朝來烈風は驟雨を伴つて東京市郡一帯を襲つたが十時過ぎる頃には、風雨收まつて、青空を見せた、大氣は尙ほ鬱蒸を感じた。然し人は青空を見てタイ風の餘波も事なく通過し、天氣は好晴に復し、平安に經過するものと信じた。然るにこの市人の平安と安易とを裏切つて、正午十二時五分、俄然東京全部は未曾有の大激震を感じ、忽ち市内一切の家屋は家根瓦を振るひ、龜裂を生じ、傾斜、倒壊し、これと同時に火を失し、數分の中に十數箇所を發火し、折からの烈風にあふられて火の手は四方八方に擴がり、市中は瞬くまに、阿鼻叫喚の焦熱地獄の凄慘たる光景と變じた。震源地は、伊豆大島の東、東京を距ること二十六里の海底と發表された（大森博士發表）餘震は漸次沈靜微弱となつたが、間歇的に動搖した、その間に火は川捨なく延焼

し、三晝夜間斷なく猛威をふるつて全市を焦土と化した。その災害の程度、狀況に至つては到底何人も想像し能はず、筆紙のよく盡す處でない。記者は以下觸目聞知せる處によつてその實狀を描き出さう。

一一、遭震刹那の光景

自分の乗つた省線電車が將に萬世橋驛構内に這入りかけた瞬間である、忽ち車臺は激動して讀書してゐた自分は、とつさに脱線顛覆といふ觀念が浮かんだのでシートから立上つたが、激動のために腰がすはらなかつた。辛く釣革をつかんで右手窓外を瞥見すると萬世橋郵便局の壁が大龜裂と共に剝落し、殆ど同時に驛のプラットフォームの家根が一部崩壊して車臺に落ちか、つたが、そこで辛く車臺は顛覆を免れて停車した。乗客は一同始めて大激震が帝都を襲つたことを知つたのであつた。激動後左手川向ふの市街を見ると一瞬の間に、平安な都、商店、住宅、工場、倉庫、その他軒を並べ、青空の下に日向ほこりしてゐた都會は、忽ち一變し、いづこの家といふ家も家根瓦剝落し、或は傾斜し、或は倒壊し、砂塵は激動に伴ふ烈風のまにくゞ濛々として赤

暗く空を蔽ひ、一瞬の前の清明たる光景は、一瞬の後の暗憎凄慘たる光景となつて、市民はいづれも街上に逃れ、動搖また動搖の襲つて来る毎に、戦々恟々として空を仰ぎ、家を危ぶみ、運命を氣づかつて號泣した。自分は萬世橋驛構内の土手上に同車の人達と避難したが、河岸の物上げ場の石材、煉瓦、木材その他あらゆるもの、堆積が倒壊し、残る廣場は續々と来る避難民の女子供老人で埋まつた。街上は着のみ着のまゝの避難民で川のやうな流れを作つた。街角の廣場では負傷者が擔ぎだされてゐる。空は刻々暗憎として太陽がいぶし金のやうな怪奇な光りを發してゐる。ゴーツといふやうな物鳴りと一緒に激震がやつてくる、その毎に家屋や樹木はユラユラと動搖し、その都度光景は慘鼻を加へる、自分達は殆ど立つてゐられないので、そこらの雜草なごをつかんで身體を支へた。第一回の激震があつて數分もたつたかと思ふ頃倒壊家屋からと思ほしく盛んに黒煙をあげ火を噴き出した。あれよあれよと見るまに市内十數箇所から煙をあげ火を發すると共に、折からの烈風で火は忽ちに四方へ延焼し一層凄愴たる光景に變じた。自分は進退兩難に陥つたが、かくてあるべきでないので少し震動が遠ざかつたのを機會に歸宅すべく省電の線路を傳つて、萬世橋か

らお茶の水驛へと歩いた。それが一番安全な道と思つたからである。ところがこの間の線路は無事であつたが、しかも所々上方の石崖から上の倒壊家屋の家根瓦や、煉瓦がそこに散落してゐた。でこの道も安全ではないことを知つたので、連れと一緒にお茶の水驛から上つて街に出たが、同驛もフォームは傾きお茶の水橋上から見ると自分が今辿つて來た頭上に電柱がモロに折れて辛く電線で支へられてゐるのなぞあつて慄然とした。お茶の水橋を渡り續々たる避難民と一緒に神田川に添つて水道橋の方へと走つたが、まだその時は順天堂はそつくり焼けずにその前の廣場には避難民が山のやうに群がつてゐた。お茶の水から二二三丁進んだと思ふところで、自分達は二度慄然とし、且つ自分達の生命冥加を喜んだ。といふのは對岸省電せん路の崖上約一丁餘りがその上の住宅もろとも崩落し、省電せん路を破壊して神田川をうづめて了つてゐた。自分の乗つた電車がもう四五分遅れてゐたら、自分達はとうに鬼籍に入つてゐたらう。またもしお茶の水で街路へ出ずに尙せん路を傳つてゐたら進退谷まつてゐたかも知れない、上はと見れば駿河臺一帯をやき拂つた火の手が既に對岸の最後に残つた家並をやいて火の海となり風下になつた自分達は頭の毛もチリチリと焦けさうであつ

たからである。で一時街頭に棄てられた電車内に逃げ込んで煙と火をさけながら充分に身仕度をした。そのうちにも火の手は益々激しくなつて川を隔て、るながらこなたの街も延しようを免れさうにもない、萬一兩側に火を受けては到底脱出が困難と感じたので、電車を飛出すと熱風を冒して右手に切れ眞砂丁に出、春日丁へ走つた。かくして自分は危急を脱したが、自分達の辿つた道筋はその後間もなく延しようして全く灰土となつた。電車道は地しんをさけた避難民と荷物とで一杯であつたが、更に火の手が家をやき、持出された道路の荷物にさへ延しようしたので、今は人々は生命一つを辛く保ち得れば最大の幸運であつた。悲惨な有様は言語に絶えた。

三、其夜の光景

夜に入つても時を置いてしん動あり、且つ火事は水道断絶、消防に従事すべき人もすべて焼け出されたのでその方法もなく、火の海の擴がりゆくまゝに任せただけで、火焰は炎々天を焦し、電燈なく、警察なく全市暗夜に拘らず、さながら白晝の如く、火焰の前に逃げ惑ふ避難民は焦熱地獄の苦悶を描き出し、或は絶望し或は失心し、いづれ

も運命を觀念し僅に身をもつて火先を逃れさくるのみである。死者、傷者、病者、迷兒、路傍にさ迷ふもの算なく、いづれも朝來食を攝らないので、飢えと暑さに疲勞し盡し氣息奄々としてゐる。當夜さい害範圍餘りに大きいのと且つ火廻り早きため炊出しは不能で、陸軍から軍用パン數十萬個を出したが一部の人々の寸時の飢を凌ぐに過ぎない、何十萬とも數知れぬ難者は早くも飢餓に迫り、居るに處がない、唯々酸鼻の感に耐へない。

四、被害實狀

大地震の損害は市郡全般であるが、悲惨を加へたのは震災と同時に生じた倒潰家屋からの出火で、これがため市内十五區中、神田、日本橋、深川、下谷、淺草、本所、京橋の最も人口多く、市内の繁榮地として目指された七區は全焼して遂に一片の焦土に歸し、本郷、芝、赤坂、麴町の四區は其の大半を焼失し、牛込、麻布、四谷、小石川の四區辛くも其の一部焼失に止まるを得た。その火の延長は南は芝金杉橋より北は南千住の郡界に至り、東は本所深川全體、西は九段坂に至る一大火の海を現出した。

火は一日晝から三晝夜にわたつて家屋と人畜をやき、世界の大都、東洋隨一の都市も其の三分の二は遂に烏有に歸した。蓋しかくの如き短時間内にかくの如き大破壊を見たのは全く何人も想像し能はざる處である。災害の最も甚だしきは所謂下町で、市中繁華の地人口稠密、店舗のきを並べ、且つ一旦火を呼んでは消防に困難なる大廈巨屋林立してゐるためその損害は最大限度に及びことごとく焦土と化した。六十年以前の安政の大地震に比するもその損害は數層倍し、都市として發達せる點に於て、その損害の大なる點に於てこれと比較すべきは往年の桑港の大地震あるのみである。半世紀を超ゆる努力と富とを以て築かれた都、全國政治經濟の中心地として、歐州大戰によつて得たる富の大部を包容し、大都市の繁華と美觀とを誇れる都會も、自然が一瞬の間に揮ふ破壊力には抗しやうもなく全く焦土と殘燒物の堆積する廢墟となつた。火事の模様を見るに麴町丸の内に於ては大建築内外ビルディングは第一回の激震と共に柱中斷して崩潰し、多大の死傷を生じたが、これと前後して附近より出火し、警視廳、内務省、大藏省、帝室林野管理局等に延燒し、一方の火の手は飯田町より發して神田駿河臺に及び更に神田一圓を燒盡し、一方の火の手は日本橋區堀留附近藥種屋倒潰と

同時に藥品より出火し京橋および芝を燒き、更に一方の火の手は吉原より發して下谷淺草方面をやき、尙一方の火の手は本所、深川を燒いた。罹災民は續々宮城前、濱離宮、日比谷公園、上野公園其他の廣場に逃れた。

著名な建物の一部燒失或は全燒せるものは高輪御所の一部、日本銀行の一部、警視廳、内務省、逓信省、文部省、大藏省、農商務省、帝室林野管理局、鐵道省、村井銀行、三井銀行、住友銀行、十五銀行、三越吳服店、白木屋、松坂屋、松屋、高島屋、伴傳、第一相互、星製藥、帝國劇場、精養軒、順天堂、神田明神、日比谷大神宮、ニコライ堂、學校では帝國大學の一部、商科大學、商工學校、明治大學、日本大學、中央大學、專修大學、外國語學校、海軍大學、女子師範、停車場では上野驛、萬世橋驛、神田驛等で、橋では、まないた橋、吾妻橋、うまや橋、神田橋等いづれも崩潰した。警視廳の報する處によれば死者二万五千、傷者十万、燒失家屋三十五萬戸、とあるが實數はむしろこの數倍又は數十倍と想像される。

罹災民の慘狀は目も當てられず、激震後、電車道、廣場等に逃れた人々は續いて起つた火事に追はれ、市内北部の住民はいづれも上野公園より遠くは飛鳥山方面に逃

れたが、上野は避難者最も多く、命辛々で逃げた罹災民は飢餓に迫り疲勞困バイしつゝ、夜天を焦す全市の火焰と間歇的に訪れる震動に脅威され戦々恟々野宿したものの無數で、附近鐵道線路にはいづれも軌道を枕とし、或は貨車の下に入つて雨露をしのぐあり、又本所方面では、全焼のため居住民は續々として小松川、上野方面へ逃れたが水道斷水、食糧皆無のため忽ち飢餓に迫つた。大川の兩岸を連絡する橋々は避難民のために交通不能となり、うまや橋、吾妻橋は焼け落ちた。中にも横網町被服廠跡空地附近に避難した住民約三萬人は周圍よりの延焼でことごとく焼死し、又原庭署管内のみでも死傷者二千に上つたといふ報告がある。又神田區の罹災民の一部は一度商科大學に逃れたが、同所も類焼した爲め辛くも佛國大使館に難をさけ漸く生命をとりとめた。其後發表された各所避難所及び工場等で焼死した著しきものを挙げれば左の如くである。

山積せる死人

本所被服廠跡

三萬名

吉原遊廓内

二千名

坂本公園

二百名

吾妻橋際河中

八百名

本所横網町安田邸内 二百名

王子製紙

百七十名

王子染絨

八百名

向島吾嬭村

百名

尙ほ大川筋では火に追はれて或は河中に飛込み、或は顛落したものの無數で慘憺たる漂流死體となつて水面を蔽ふてゐる。例へば濱離宮附近及び月島築地の海岸筋から逃れて漕出した船は全部焼失して死亡者は附近海岸に骸を晒らし、水上警察署はモーターで航行し大川筋、小名木川海濱一帶の死體を運んでゐるが、救濟船は無數の死體漂流のため航行不能で困難してゐるといふ。以てその慘狀を想察すべきである。尙ほ死者の數は逐日判明すると共に増加の一方にて到底豫想以外である。

五、近縣各地概況

横濱の全滅、震源地に一層近きたため損害甚だしく全市家屋ことごとく崩潰焼失し、死傷最少限度で約十萬、市民が一時のがれた正金銀行カモン山は火の包圍を受け正金銀行のみで三千名の黒焦慘死體發見され、市役所附近の慘死體その數これに次いだ。生存者は小安方面に續々逃出で、又一部は海上に逃れた。海上に逃れた人々は

食糧缺乏のため飢餓に迫り、また港の内外は波浪のため汽船の衝突坐礁するもの數知らぬ有様であつた。

横須賀慘害、横須賀は市の一部、佐野の一部をのぞき全部倒壊し震災と同時に各所から發火、目抜き場所である大瀧、若松、小川、アサヒ、山王、稻岡、深田、念音寺の各町および海軍機關學校海兵團を焼失、一方高臺たる公郷の一部と海軍病院を中心としたる一帯を焼きつくして鎮火したが、軍港内箱崎の海軍重油タンク爆發延焼し死者數千を出した。

三崎町全滅、三浦半島三崎町は山の手僅かの住宅を残すのみで全部倒れた上焼失、死者は人口の六分におよび、浦賀町は倒れ家屋約半數の見込み、浦賀船渠會社は全焼、田浦町は七分通り倒れ死者二三百を出した。

鎌倉全滅、鎌倉は地震と共に全家屋殆ど倒壊し且つ火災のため大半焼失した。鶴ヶ岡八幡宮はつぶれ、長谷の大佛像はあの巨軀が三尺もずつたさうである。

大磯地方、は被害比較的少かつたが名流の別荘その他倒壊夥しい。

小田原の慘害、小田原地方は海嘯と火災にて殆ど元状をとめず、小田原小學校では兒童千二百名壓死した。

静岡縣下損害、縣下の震害は沼津以東と伊豆東西海岸に多く、小山町はほとんど全滅し、下田、伊東地方はつなみのため流失家屋多く死者多數に上つた。

箱根の被害、強羅、小涌谷はほとんど損害なく宮の下は全壊したが死傷者は少い、底倉は損害甚だしかつた。

熱海の震害又甚だしく一萬の人民餓死に類してゐるといふ。

房總半島方面、は南方に至るに従ひ被害甚だしく、館山北條死傷一千、倒壊家屋一萬、木更津同百、同三千、南朝夷同千二百五十、同二千五百、銚子九十九里ヶ濱より南朝夷までは大なる被害がなかつた。

其他、茨城、栃木、群馬、埼玉、山梨等の諸縣に於ても損害少からざるものゝ如く、埼玉縣にては川口町最も甚だしく各所に火事を起したが消防手の盡力で大事に至らなかつたが二日までに判明せし處では、死者一八二、傷者三七九、全壊家屋五、七六六を下らなかつた。

これら各地に於ける鐵道の沈下陥没トンネルの崩壊と列車の脱線顛覆破壊は夥しく

死傷多數に上つた。

尙地震と同時に震源地たる伊豆七島は大噴火をなせるもの、如く各務ヶ原より出發せる陸軍飛行機の爲したる視察の結果によれば、大島に二本、大島より南方にあたる島に三本の大火柱あり根本小さく上に従つて大きく上空に於て合致して東京方面に向つて流るとの報告があつた。

六、戒嚴令施行と災害救濟

九月一日未曾有の震害突發し平時維持された秩序は失はれ、交通の組織も警察の制度も到底この天災に臨んで無力となり、失心絶望した市民の中に、暴舉に出るものないとも限らぬので、また民心を安んじさせ、罹災者救恤の一瞬もゆるかせにすべきでないところから、事態容易でないのを見ると、政府はたちまち全市及び近接郡部に戒嚴令を布きもつて秩序の維持回復につとめ、一方罹災民救濟の手段を百方講ずることになつた。二日政府が發表して、戒嚴令施行、一政府ハ昨日ヨリ東京市内及近接郡部ニ戒嚴令ヲ施行セリ」とあるものがそれで、各在郷軍人團並に青年團等凡て出動して

罹災民救助、秩序維持に任じた。尙ほ政府は更に罹災民救恤の方法として、非常徵發令を發し、一方罹災民に對する救濟の資料を徵發し、兼ねて、食糧其他物資不足のため誘發される掠奪その他の暴舉を未前に防ぎ、且つ奸商等が機に乗じて暴利を貪ることを制壓した。

勅令第三九六號 非常徵發令

第一條、大正十二年九月一日ノ地震ニ基ク被害者ニ必要ナル食糧、建築材料、衛生材料、運搬具其他物件又ハ勞務ハ内務大臣ニ於テ必要ト認ムル時ハ其非常徵發ヲ命ズルコトヲ得

第二條、非常徵發ハ地方長官ノ徵發書ヲ以テ之ヲ行フ

第三條、非常徵發ヲ命ゼラレタル者徵發ノ命令ヲ拒ミ又ハ徵發物件ヲ藏匿セル時ハ之ヲ徵用スルコトヲ得

第四條、徵發物件又ハ勞務ニ對スル賠償ハ其他市場ニ於ケル前三ケ年ノ平均價格ニ依リ之ヲ定ム、其平均價格ニ依リ得難キモノハ賠償委員ノ評定スル處ニ據ル

第五條、非常徵發ノ命令ヲ拒ミ徵發物件ヲ藏匿スル者ハ三年以下ノ禁錮、三千圓以

下ノ罰金ニ處ス

徴發シ得ベキ物品ニ對シ當該官吏吏員ニ申告ヲ拒ミ又ハ虛偽ノ申告ヲナシタルモノモ亦同ジ

第六條、徴發物件ノ種類、賠償ノ手續、評價委員組織、其他本令ノ施行上必要ナル規定ハ内務大臣之ヲ定ム

附則、本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ實行ス

本令は三日午前發布と同時に實施せられ、食糧品その他日用必要品の徴收配布を敏活ならしめた。

更に政府は豫備金支出として二日、九百五十萬圓の緊急支出をなし、又臨時震災救護事務所を設け、これが各部署を定めて罹災民救済に力め、飲料水供給に就ては三日正午までに工事を完成し下谷、淺草、深川、本所其他下町方面の給水を開始し得べき旨、及び米の供給には心配なき旨の布告を爲した。而して市郡の警戒には、近衛騎兵隊、町會議員町役場吏員、消防、青年團各幹部、在郷軍人、其他を以てこれに當り、警戒遺漏なきを以て安意すべき旨を布告した。布告に先立つて着々警戒の實施に努めた。

治安方法の施行と共に最も痛切なのは既に焦眉の急に迫れる米その他食料品と日用物資の缺乏である。これがために徴發令を發した一方陸軍糧まつ廠の殘燒米數萬石を以て直に救恤に充て、飛行機を利用して大阪に米穀その他糧食の至急輸送を命じ、軍艦その他汽船を以てこの用にあつる旨を發表した。次いで四日には米四十萬石大阪より着京、いづれも東京府廳に收納した旨を發表した。これと同時に東京市役所在庫高として米百五十石、うぎん六十箱、澤庵三百樽現存、又埼玉縣より米一萬俵河口驛へ到着した旨を發表し、之が配給に全力を擧げた。

一時東京と各地との交通は全く不通となつたが、三日には列車開通に關し左の告示が出た。

七、列車開通

東北線 日暮里田端より

信越線 同

常盤線 日暮里又は南千住より
中央線 飯田町より八王子間三日開通

以西不通

總武線 龜戸千葉稻毛、佐倉まで運轉

東海道線 品川川崎間開通

以西不通

いづれも避難者は無賃で輸送に任じてゐる。

而して市内電車及び省電は尙ほ當分開通の見込はない。蓋し鐵道連絡の能否は罹災者救助の遲速に大關係あり且つ萬般の回復策に密接の關係があるので當局者は鋭意その修繕に努力してゐるが損害の程度容易にその復舊を許さない。

七、新内閣成立

この災厄の間にあつて二日午後七時、山本權兵衛伯の組織に係る新内閣は左の如き閣員を以て成立した。總理大臣兼外務大臣、山本權兵衛、内務大臣、後藤新平、大藏

大臣、井上準之助、陸軍大臣、田中義一、海軍大臣、財部彪、農商務大臣、田健次郎、司法大臣、平沼麒一郎、文部大臣、岡野敬次郎、逓信大臣、犬養毅、鐵道大臣、山内一次、蓋し政治的中心地に起りたる今回の災害に顧み、急遽新内閣を成立せしめ機宜の處置を以て國民に安心を與へるの必要ありたるに因ること勿論である。

八、東宮殿下御無事

一日朝から宮中へ御出ましの攝政宮殿下は地震起るや直に吹上御苑に御避難あり其後御無事赤坂離宮へ御歸還あり、宮内省より船橋無線電信局經由で日光田母澤に在らせらるゝ兩陛下の御許に攝政宮御無事を御通知申上げ尙ほ兩陛下の御機嫌を奉伺した。又諸皇族の御消息については、海軍少尉華頂宮博忠王殿下には田浦、横須賀間汽車進行中トンネル崩壊し列車はうづめられたが殿下は危くも御一命を全うし、閑院宮寛子女王殿下は御不幸にも薨去あり、御遺骸は驅逐艦時雨で四日品川沖に着いた。山階宮妃佐紀子女王殿下には鎌倉の御別邸にて薨去遊ばされ、其他皇族中、沼津御用邸に御滞在中の竹田宮大妃内親土殿下、御若宮姫宮には五日静岡からの情報で御無事判

明、箱根湯本御滞在の北白川宮大妃殿下の御消息は五日尙ほ不明である。

九、聖上御下賜金

天皇陛下は今回の災害を御憂慮あり罹災民に一千萬圓の御下賜金があり、赤坂離宮に於て攝政宮殿下より總理大臣が拜受した。

以上は匆忙の際、不備な材料と見聞とによつて報道的記録を作つたので、勿論筆者自ら不備不満であるが、大東京震災の有様を逸早く未知の諸賢に傳へ、不備ながら記録の一材料を提供する次第である。幸に讀者の迎ふる處となり、機會を得れば續いて東都震災見聞録といふやうな追録を出し、更に詳細な數字等も載せたく思つてゐる。

——完——

(九月五日)

□ 本書賣上代金の一割は之を□
□ 罹災者救済費の内に寄附す□

曠野社同人

著者 木村 莊 十二

東京府北豊島郡長崎村一六二一

發行兼印刷者 長 島 豊 太 郎

東京府北豊島郡長崎村一六二一

印刷所 曠野社印刷所

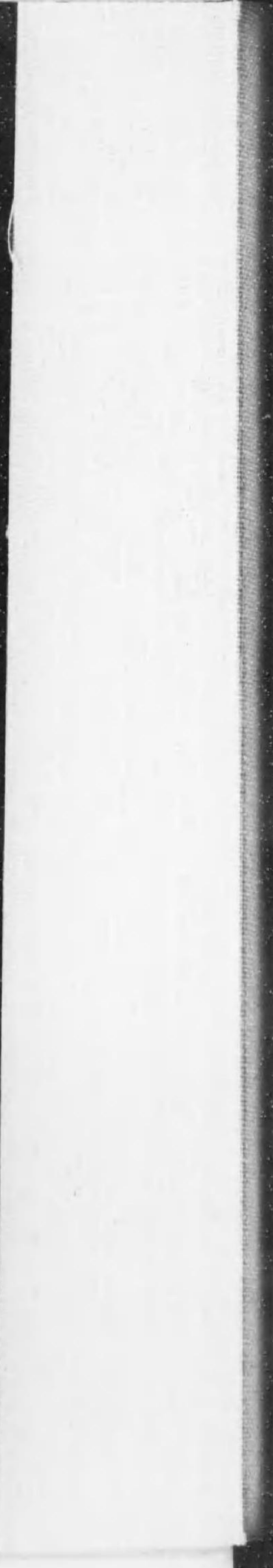
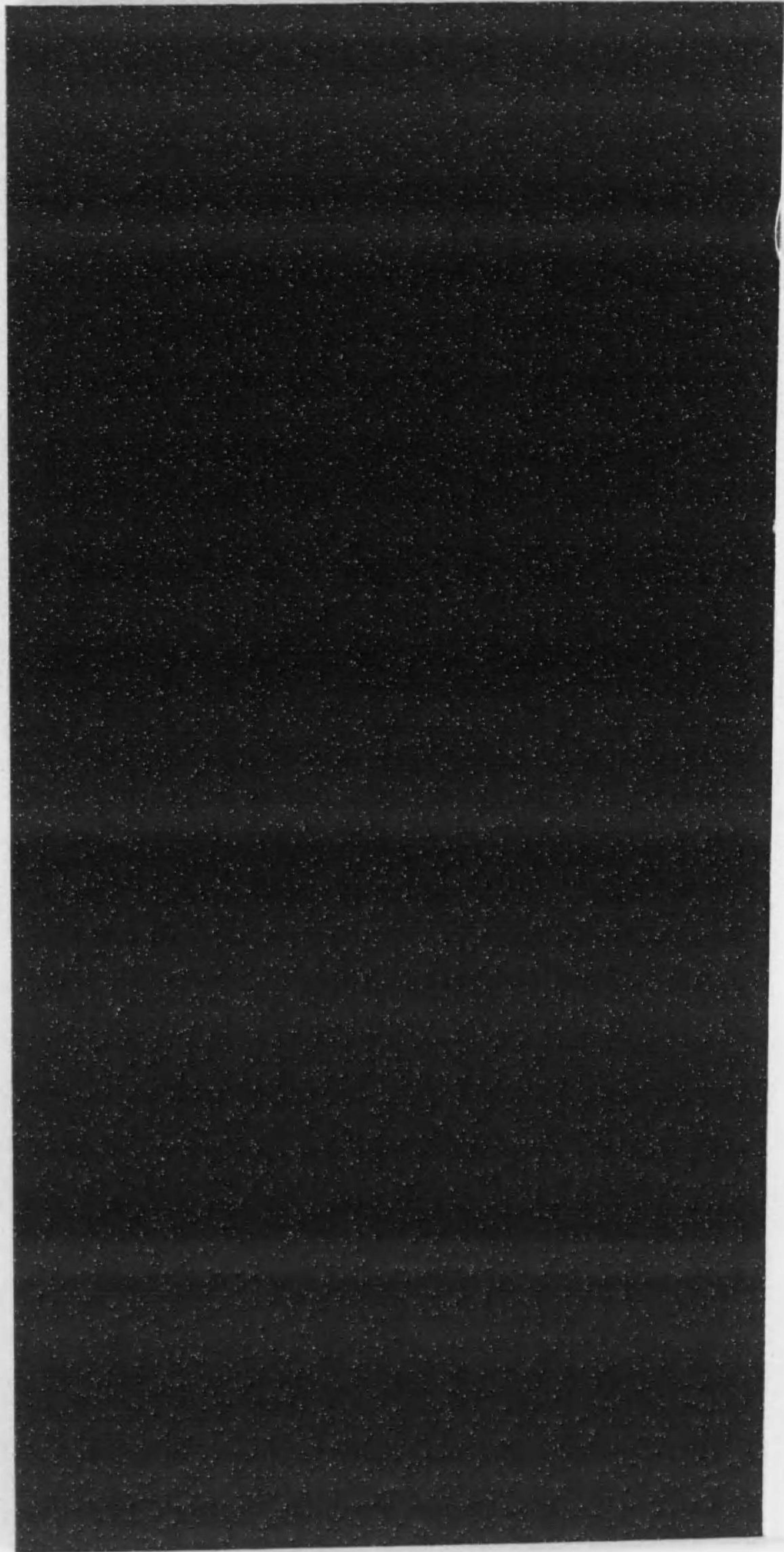
東京府北豊島郡長崎村一六二一

發行所 曠野社

大東京震災實記

大正十二年九月九日印刷 大正十二年九月十二日發行

定價金十二錢



終